

## 森村道美さんをしのぶ

株式会社都市環境研究所 最高顧問

土田 旭



森村さんに久しく会っておらず、大学関係者と連絡をとって、もう少し都市計画についても語る機会を得たいものだと思っていたが、後悔せざるをえなかった。

### 学生時代

さかのぼって、森村さんと身近にお会いしたのはほかでもない、上の学年の森村さんたちとわれわれ下の学年が賑やかにしていた昔の話で、丹下先生の研究論文を数値、数表からさまざまな角度でまとめる仕事を頼まれてくれないかということで、作業スペースは丹下先生ご自身で設計されたご自邸だということだった。まだ学部の学生だった者にとって、そのような場を体験できることは滅多にないことで、2,3人を連れてきてほしいということだったが、ちょっと声をかけただけですぐに集まった。

しばらくして森村さんに連れられ、お手伝いの作業内容を聞いた後、作業をしてみてもある程度の目途はついた。夕食をいただき、内容の説明をさらにしていただいたが、初めての日で、時間が伸びたので、運転手さんに各々便利な駅まで送っていただいた。運転手さんの話はそれ自体が面白く、それもまた一つの勉強になった。

結局、土田、洪、吉田の3名がお手伝いをするようになった。先生の仕事は基本的に、手回し計算機とグラフづくりが主になり、森村さんや、すでに大先輩の渡辺さんが指示を出したり、チェックをしたりというところでそれなりにバランスをとっておられた。

ところで森村さんは、受験勉強もよくされたようだが、時折映画を見に行くことが大好きのようで、歌謡曲をさえずられるのが習慣性ともいえた。森村さんの故郷では、森村の坊ちゃんがまた勉強そっちのけで歌謡曲を口ずさみ、それに合わせて映画館に通っていて困ったものだと言われていた。というかご本人がそう言っておられた。

当時学生がグループであるいは共同で勉強をしたり制作をしたりだったが、製図台の他に研究室や作業室が不足していた。その頃、一号館の屋上の資料室に太田博太郎先生、藤島亥次郎先生などの古代建築の模型が多く陳列されていたが、一部の場所を借り

てなんとか6,7人は入るかという研究室・作業室を大工の文ちゃん(もう少ししっかり言えば文男さん)になんとか拵えてもらった。

ここは、川上さん、磯崎さん、宮脇さんその他の先輩連中が顔をちょくちょく出していて、われわれの溜り場になっていたが、昼前に早く来ると森村さんの口ずさむ歌をよく聞かされたものだった。

話は少し飛ばしたい。というのも、岩波講座のシリーズものは手堅くて、どういう訳だか、岩波講座「現代都市政策Ⅸ」のうち“都市の空間”を10人ほどで書き分けたものだったが、川上秀光、大谷幸夫、鈴木成文の3先生に研究生の森村さんが著述し、それ以外に土田、内田雄三、南條道昌、土井幸平ら院生が、都市の地形区分や空間形態と空間計画、空間構成、地区環境整備といったいくつかのテーマを分担したものであった。

### 広島

広島市の平和公園などは新しい都市計画の始まりともいえた。丹下先生、大谷先生、大高先生といった方々に森村さん、藤本さん、土田らが都市計画あるいは集合住宅デザインに参加できたことは大きい。

森村さんは、一定期間、広島、言い方を変えれば広島市役所あるいは広島大学客員宿泊所におられた。広島市を広域行政或いは広域都市としてとらえ、広域的な土地利用について研究を行うことが一つの目的であった。市役所の方々と勉強をしつつ、いくつかの分野にまぎれ込むことも何度か試みられたようである。とくに市街地の外側、農地に関して知ることが大切で、農業に詳しい東大農学科出身のベテラン職員の方にいろいろと教わることになり、郊外部あるいは周辺部の農村部が主体の山村あるいは漁村をよく歩き、さらにさまざまな市街地を観察し、市役所の方々と意見交換をしておられたのを覚えている。

### 富山

富山についても広域行政あるいは新産都市という地域開発構想が各地で展開され、射水地域の広域行政、そして新産業振興など

が検討されるに至った。森村さんは、市で広域都市圏の研究というか合併について考えられた時、しばらく滞在されたのではと思う。

森村さんが総曲輪のある店で知名人というか、文化人に会ったそうだ。Kさんと呼ぼう。酒とともに話がはずみ射水平野から砺波平野の防風林、そして神通川の北に沿う呉羽山とそこからの眺め、この呉羽山の南斜面に家を建てたいというのが話の始まりだったようだ。たしかにこの眺めは今もって素晴らしい。話がはずむなかで、是非栗の木で拵えることをお奨めしたいと申しあげたそうだ。この栗の木は素直な樹木で、家屋に良くなじむことを申しあげたついでに、と言ってはなんだが、建築家白井晟一さんを是非お奨めしたいと申しあげたそうだ。機会があったならば白井さんにお話をしたいということで、帰京した折、白井さんにお会いでき、これまでのことを申しあげたそうだ。再度富山でKさんと白井さんがお会いできる機会を見つけ、その構想を話すことで、皆意気投合したようだ。白井さんは早速栗の木に賛同、銀行で用立てを受けた後、高山に行って栗材を手当てしてくれることを含めて直ちに段取りに入った様子で、森村さんはこの顛末をすっかり興奮して語られたようだ。秋に入って高山の材木市が開かれた時、栗の木を入手できたそうで、後は工事を見守るだけだったろう。

施工後、施主をはじめとして、森村さん、白井さん、皆さんは満足だったように思う。

## 森村先生のご業績

東京大学都市工学専攻・教授

大方潤一郎

森村道美(もりむら みちよし)先生は、昭和10年6月25日に群馬県伊勢崎市にお生まれになり、昭和29年に群馬県立前橋高校を卒業、昭和34年東京大学工学部建築学科卒業、昭和39年同博士課程単位取得退学、同助手、昭和46年に助教授、昭和62年に工学博士を取得され教授に昇任、平成8年に東京大学を定年退官され、長岡技術科学大学教授に移られ、平成13年同定年退官。その後も長岡に居住され、長岡のまちづくり等に貢献されていらっしゃいましたが、平成24年10月29日ご逝去されました。享年78歳でした。

先生のご著書・論文等は多数に及びますが、主要な書籍としては、「都市空間計画の課題」『岩波講座：現代都市政策IX：都市の

## 長岡

長岡を拠点に、「長岡ニュータウン」が造成され、大学のみならず生産の方も長期発展計画で伸びるだろうし、大学にとどまらず将来性をも買われたのではないだろうか。長岡市街に近い「西山丘陵地」、川向うではあるが信濃川沿いにいくつもの施設が作られて、レベルの高いデザイン教育も行われるようになった。もう少し遠い三条などでも、技術力が評価されるようになりつつある。この2ヶ所をさらに発展させることが望ましいのはいうまでもない。そもそも「長岡ニュータウン」「テクノポリス」をうたったのも、宅地開発団体が積極的に新しい地域、街をつくっていくのであるから、これもまた積極的に評価すべきであろう。東京―関西―広島―富山―長岡といった一連のつながりをもった成果として都市に残されていくことを願いたい。

長岡技術科学大学をリタイアするので、駅に近い場所に居を定めようと考えているが、軽い食事と酒で話ながら会わないかというもので、それならばということで会うことにした。比較的元気そうに見え、この後の予定というか計画について多少考えるところを述べていた。要は市街に近い所に居を定めたということと、富山にもう一度行っておきたいということ、健康の方は医者にかかっているが、それほどでもないということで、やはり悩みもある程度お持ちだったようで、飲みながらいろいろ気楽な会話をした。

森村さんは次々に新しい地を求めて旅をしているだろうが、教え子の中に平井さんその他多くの友人が生れつつあるに違いない。

空間』岩波書店,1973。『コミュニティの計画技法』彰国社,1978。『特集コミュニティ・デザイン』建築文化5,vol.31,no.355。『新建築学大系16：都市計画』彰国社,1981。『マスタープランと地区環境整備』学芸出版社,1998。など。ご研究の主軸は、都市基本計画、土地利用計画、コミュニティ・レベルの計画技法でした。都市工学科の専門図書室の構成、学部生演習のカリキュラム構成と運営など、教育にも尽力され、また、指導教官として、多くの都市計画の研究者・専門家を育成されました。プランニング・マインドを育てることの大切さを常に説いておられました。